

令和2年度黒潮町戦没者追悼式「平和作文」コンクール

「令和2年度黒潮町戦没者追悼式」が3月20日(土)に執り行われました。

この式典は、平成23年度から町内にある佐賀、白田川、大方の3遺族会が合同で開催しています。戦後70年を経過し遺族も高齢になる中、遺族の思いを後世につなぐことを目的として、今年度、初めて町内の中学生に「平和作文」の朗読をお願いしました。以下抜粋してご紹介します。

「戦没者追悼式典に寄せて」

佐賀中学校3年

明神 心嶺

私は、昨年の夏、1冊の本と出会いました。この本は、1人の少女が現代から昭和20年にタイムスリップしてしまう話です。昭和20年…。そうです。あの太平洋戦争が終わった年です。

皆さんは戦争について、どんな考えを持っていますか。私の中の「戦争」というのは、本当にくだらないもので、私たち国民が反対

すれば、戦争なんて起きないと信じています。

でも、昭和20年では、「戦争はよくない」と反対すると、ひどい目に遭わされてしまうような恐ろしい時代でした。本の主人公の少女も戦争について本当に無知で、「やっちゃいけないこと」と軽い気持ちで考えていただけだったのに、タイムスリップしたことで、あの戦争を体験し、多くの辛い目に遭うことになりました。そんな少女を支えてくれたのが、1人の青年でした。その青年は心優しい人で、大切な人を守るために、特攻隊員に自分から志願した人でした。特攻隊というのは爆弾を積んだ飛行機で敵艦に体当たり攻撃を行った部隊のことです。

私は、中学校2年生の時、修学旅行で沖縄に行きました。平和学習の一環として、平和記念公園やひめゆり資料館、そして、当時住民の避難壕や病院壕として使われた糸数壕を見学し、戦争の悲惨さを知ることができました。資料館に並べられていた、私と同年代の1人ひとりの写真を見ながら「あの戦争がなければどんな人生を歩んだのだろう」と考えたりもしま

した。

修学旅行に一緒に行った友達は、沖縄戦で犠牲になった親戚のために、地元のお水を持って行きました。この黒潮町の中にもあんな遠い場所で犠牲になった人がいることを初めて知りました。特攻隊に限らず、沖縄戦や原爆で亡くなった方々には、本当に色々な心残りがあつただろうし、心の中では、誰もが死にたくないと思っていたと思います。

私の最初の戦争に対する思いは、ただくだらないもの、という軽いものでした。けれど今は、人の生きる権利を無理やり奪い、多くの人々の尊い命を奪った戦争に、とても腹が立ちます。私は戦争を最大の人権侵害というふうに捉えています。人権侵害というのは、正当な理由、若しくは手続きなしに個人の自由を奪ったりすることを言います。正当な理由があつたのかどうかは分かりませんが、「生きたい」と願う人々の命を簡単に奪っていった戦争は、絶対に繰り返してはいけないことの1つだと、私は思っています。

また、私はこの本から、楽しい日々は永遠に続くわけではないと

いうことや命の尊さを改めて実感しました。大切な人がいて、今、その人達と距離ができてしまったらそういう時間はとてももつたない時間なのだという考え方ができるようになりました。そして、家族と一緒にいること、温かいご飯が食べられることは、今の私たちにとっては「普通」のことです。しかし、戦時中の人々にとって、それがどんなに幸せなことなのか。私はそれを知ることができました。これから先、今私達が普通にしていくことが、いつ失われるかわかりません。そして、今共に過ごしている人達との時間は、永遠に続くとは限らないのです。

だから私は、今の時代を守るために戦争で亡くなった青年達や、犠牲になった多くの人達の分まで、命を大切にし、自由は何でもできるこの世の中を精一杯生きていきたいと思えます。



式典で作文を朗読する明神さん